

目的 現在ではファッション情報が豊かになり、それに伴い着装される被服も種類が多く、その与えるイメージ効果は大きな意味をもつものである。被服のイメージ効果についてはシルエット、柄、配色ならびに嗜好性などを検討したものが報告されている。しかし服装のイメージ効果は完全に製作された衣服を人物が着用した場合に現われるものと考えられる。そこでこの観点から実験を行い着装のイメージ効果とその要因を明らかにし、さらに着装のモデル化を検討し、被服デザインの創作に活用するため本研究を行った。

方法 実験はまずスタイル画により服装形態を選定し、抽出された形態についてシルエットに適した素材で実際に衣服を製作し、人物に着装させて撮影したものを基にカラーシミュレーターにより多数の色変化を試みた。この試料をSD法で評定して、因子分析、分散分析及び多重分類分析を行い、着装のイメージとその要因の相互関係を検討した。さらに配色シミュレーション装置に陰影装置を併合し材質感を挿入して着装のモデル化による実験を行い、前記と同様に解析し両者の関係を検討した。

結果 着装によるイメージ効果は評価、機能性、軽量感、暖かみの4因子で表わされ、評価の因子には形態と色彩、機能性の因子には形態、軽量感と暖かみの因子には色彩が影響を与える。着装のモデル化による実験ではこの4因子の他に目立ちの因子が加わる。暖かみの因子をのぞいてこれらの因子に材質感の影響が認められた。また着装のモデル化における実験においても着装のイメージ効果の検討が可能であることが裏づけされ、今後、服装のデザイン創作活動を容易にするものと判断した。